

誠第一一五飛行隊（特攻機十機）

〃 一一六 〃

この外誠第三十九、同四十飛行隊（特攻機合計二十機）が宮古島に配置されることになっていたが、実施されなかった。

第三章 防衛方針を水際作戦に

(1) 攻めるに易い宮古島

十九年秋に入るや敵潜水艦の出没頻り、又敵機動部隊近接の情報相次ぎ戦場化必至の状況となってきた。集団では敵来攻に備えて陣地構築、飛行場の整備、対敵訓練、武器弾薬、軍需資材の集積などに全力を傾注軍官民をあげての防衛態勢の完璧が期せられた。

孤島の防衛についてはサイパン戦の戦訓などから推して友軍海空軍の全面的協力は期待出来ず、制海制空権を奪われた戦いでは兵力の増援補給は考えられないので、戦略持久戦法は可能性がうすく、再度にわたる兵棋演習の結果、宮古島では持久戦法は採用せず、敵上陸時に於て水際に兵力を重点的に集中、一気にこれが殲滅を図る水際決戦方式がとられることになった。そして状況万止むを得ざる場合でも極力敵の飛行場利用を妨害すべく野原岳を中心とする主陣地複廓陣地に拠って持久出血戦法をはかるといのが宮古島防衛の骨子であった。

この作戦計画は主として福地参謀長が立案したと云われ、細部について「宮古島戦斗教令」が基本となっている。宮古島は地形的にみて東部は断崖が海岸に迫っているので上陸（戦車や器材の揚陸が困難）には不

これらの特攻機は沖繩戦に出動参加したが、飛行場の掩体施設が十分で且強力な防空隊（陸軍高射砲隊などの配置がなかった）を持たなかったため、地上で撃破されたりして所期の特攻戦果は収められなかったようである。

向きとされ、これに反し南部は平坦な海岸線がつづき飛行場に近く、敵上陸の可能性が大きいと云うのが戦術上の常識とされた。

宮古島防衛上の地形的難点として

イ、島が狭小で四囲から艦砲射撃を受けるおそれが大きい。

ロ、上陸可能地が多い。

ハ、島全体が平坦で敵上陸後その前進を阻止する地形上の障害が乏しい。

ニ、飛行場が上陸予想地点に近く防衛が難かしい。

などが挙げられ、反面これが敵にとって上陸後拠るべき遮蔽物が少なく、日本軍の反撃に曝露される欠点ともされた。陸路参謀はこれにつき一番苦心したのは戦車の進攻を阻止する川やクリーク、沼などが殆んどなかったことで、敵が上陸後大戦車団で一気に正面突破を強行してくると有効な防禦方法がなかったのではないかと述べている。

米軍の上陸予想地としては次の要素から平良港付近、下地村宮国一嘉手刈一带、白川湾付近が考えられ、この方面の配備に重点が置かれた。

イ、海岸が平坦で上陸が比較的容易である。

ロ、上陸支援に適している（艦砲射撃のための行動が容易）

ハ、上陸後平坦地区を一気に島の中心部に殺到するのに適して居り、

資料の推進展開が容易である。

ニ、作戰目的（飛行場の奪取）の達成が容易である。

このような宮古島の地形、守備部隊の兵力、陣地、武器弾薬などの保有量などを勘案して作られたのが宮古島防禦作戰大綱で最終的には十九年十二月二十二日、三日の両日司令部に於て第三十二軍長參謀長、菓丸參謀らを迎えて催された兵棋演習を経て定められた。これによれば島の最高峰野原岳に設けられた洞窟司令部を中心とした一連の複廓陣地が最後の決戦場となる要素が強いが、若し敵が南海岸又は北海岸から上陸して一気に主陣地に殺到、野原岳主陣地がその手中に帰した場合、集団首脳はそこで玉碎するか、或は後退して後方に血路を開き、最後迄戦斗を指揮継続するか、ハッキリした方針があらかじめ打ち樹てられていたかどうか、明確な資料がないので、明かでないが、通信施設、予備陣地などの条件から考えて後退は事実上、難かしかつたのではないか、陸路參謀は戦後の回想で「宮古島防禦作戰」計画は主として福地參謀長の考えによるもので、詳しいことは記憶していないが、状況によっては野原岳放棄、戦斗継続と云うことも想定していたのではないか。然し建前としては野原岳決戦が含みであったように思う」と述べている。

(2) 北、南地区を重点防衛

一 方針

有力ナル部隊ヲ以テ水際ヲ堅固ニ占領シ努メテ水際ニ敵ヲ撃滅ス
其ノ重点ヲ北地区及南地区ニ指向ス
敵陸上ニ堅固タル地歩ヲ獲得セバ戰鬪警戒部隊（遊撃部隊）ノ果敢ナル戰鬪ト主陣地ヨリスル挺身斬込戰鬪ニヨリ敵戦力ヲ漸減し周到ニ準備セラレタル主陣地帯ニ誘致し敵ニ殲滅的打撃ヲ与ヘテ破潰ス
状況止ムヲ得ザル場合ニ於テモ複廓の陣地ニ拠リ最後ノ一兵ニ至ル迄敢闘シ敵ヲ飛行場ノ利用及ビ設定ヲ妨害ス

二 戦鬪指導要領

- 第二十八師団兵器修理所
 - 大尉 藤本 武雄
 - 病馬収療所
 - 獸大尉 保坂 斯道
 - 防疫給水部
 - 医少佐 大科 達雄
 - 第二野戦病院
 - 医大尉 三好 祝二
 - 第三野戦病院(1/2)
 - 医大尉 横井 忠男
 - 第四野戦病院
 - 医少佐 辻 義春
- 戦車第二十七聯隊第三中隊
 - 大尉 渡辺 晃米
- 独立速射砲第五大隊(一中隊欠)
 - 少佐 西本 哲郎
 - 少佐 金子 昌功
- 海上挺進第四戦隊
 - 大尉 西江 重樹
- 海上挺進基地第四大隊(一中隊欠)
 - 大尉 瀬見 修三
- 特設機関砲第四十七中隊
 - 大尉 瀬見 修三
- 第三十二野戦物廠先島支廠
 - 少佐 木村
- 第二移動兵器修理隊
 - 大尉 堀江 輝雄
 - 医少佐 恒松陽之助
- 宮古島陸軍病院
 - 医少佐 吉岡軍一郎
- 第二百五飛行場大隊
 - 少佐 吉岡軍一郎

1、戦鬪指導ハ「宮古島戦鬪教令」、「宮古島各部隊戦鬪任務」ニヨリ明確ニ規定シ戦鬪指導の根本トス(終戦時全部焼却)

2、敵ノ上陸方面ニヨル戦鬪指導ノ概要

イ、平良港方面ヨリ上陸ヲ企図スル場合北地区隊ニ東地区隊ノ水際戦鬪部隊ノ一部ヲ増加シ敵ヲ水際ニ撃滅ス 水際戦鬪間主力ヲ以テ北正面陣地(陣地図参照)ニ配備シ敵ヲ陣地帯内外ニ撃滅ス コノ場合第六十旅団長ハ南地区隊ヲ併セ指揮シ海軍地区内陸軍陣地及南地区隊北方陣地ニ主力ヲ配置ス

ロ、南地区隊方面ヨリ上陸ヲ企図スル場合
南地区隊ニ北又ハ東地区隊ノ水際戦鬪部隊ノ一部ヲ増加シ主力砲兵ノ協力ト相俟ツテ水際ニ敵ヲ撃滅ス

水際戦鬪間主力ヲ南方正面陣地ニ配備ス(斜向的陣地ヲ含ム)
コノ場合第五十九旅団長ハ主力ヲ以テ南地区隊ノ川満拠点、其ノ東側及北側拠点ニ転移ス

ハ、佐川根湾方面ヨリ上陸ヲ企図スル場合
北、中、東地区隊ハ協同シテ敵ヲ水際ニ撃滅ス
此ノ方面ニ於テハ水際陣地ヲ以テ主陣地の前縁トス

敵上陸セル場合ニ於テハ北地区隊ハ 95.6高地、72高地ヲ確保シテ大野山林ノ錯雑地帯ニ敵ヲ撃滅ス

中地区隊ハ佐川根、モテカ拠点ヲ確保シ敵ノ南進ヲ妨害ス
東地区隊ハ中地区隊ノ後拠トナリ一部ヲ中地区隊長ニ配属シ野原中核ニ対スル敵ノ突進ヲ防遏ス

原中核ニ対スル敵ノ突進ヲ防遏ス
3、各方面ヨリ一挙上陸ヲ企図スル場合
各地区隊毎ニ独立シテ地区防衛ヲ完遂ス
(3) 軍隊区分(二十年六月以降)

◇ 集団直轄部隊

第二十八師団制毒訓練所
少佐 那須 憲三

◇ 砲兵隊

- 長 山砲兵第二十八聯隊長 大佐 梶 松次郎
- 山砲兵第二十八聯隊
 - 野戦重砲兵第一聯隊第一大隊(第一中隊一小隊欠)
 - 少佐 高矢 三郎
 - 独立混成第六十旅団砲兵隊(一中隊欠)
 - 大尉 福島 郷一
 - 特設迫撃砲隊(一小隊欠)
 - 八サンチ迫撃砲十二門
 - 海軍砲台
 - 十五サンチ加農 二門
 - 十四サンチ加農 四門
 - 十二サンチ榴弾砲 二門
 - 二十サンチ榴弾砲 二門

◇ 工兵隊

- 長 工兵第二十八聯隊長 大佐 外賀 猶一
- 工兵第二十八聯隊
 - 要塞建築勤務第八中隊
 - 大尉 岸川 善二
 - 第三十二軍野戦築城隊第四中隊
 - 第五中隊
 - 野戦作井第十六中隊
 - 大尉 藤野清三郎

◇通信隊

長 第二十八師団通信隊長
少佐 国武 達雄
第二十八師団通信隊
電信第三十六聯隊第四中隊ノ一小隊
独立第四警戒隊

◇輜重隊

長 輜重兵第二十八聯隊長
少佐 宮川 正
輜重兵第二十八聯隊(一中隊欠)
陸上勤務第九中隊(一小隊欠)
特設水上勤務第一中隊(一小隊欠)
独立自動車第二八四中隊
中尉 仁木 寛行
中尉 吉川 民好
船舶工兵第二十三聯隊第一中隊(一小隊欠)
特設飛行場設定隊

◇特設飛行場設定隊

長 第二十八師団司令部付
少佐 玉木 峯司

輜重兵第二十八聯隊第一中隊
第二百二十九野戦飛行場設定隊(海没遭難の残部)
第五百五特設警備工兵隊
中尉 下地 恵二

軍隊区分(その二)

◇東地区隊(城辺村一帯)

長 独立混成第六十旅団長
少将 安藤忠一郎

独立混成第六十旅団司令部

高級部員 中佐 甲木 誉一

独立歩兵第三百九十七大隊 少佐 田島勇三郎

〃 第三百九十八大隊 少佐 黒田 孟

〃 第三百九十九大隊 少佐 新井 佑

〃 第四百大隊 大尉 川村 尾張

独立混成第六十旅団砲兵隊ノ一中隊

工兵隊 大尉 黒木 圭三

独立混成第六十旅団通信隊

大尉 牛尾 慎吾

独立歩兵第三百九十六大隊

大尉 竹内 隆

独立機関銃第十八大隊第二中隊

独立速射砲第五大隊第一中隊

野戦作井第九中隊 大尉 高橋 信雄

◇北地区隊(平良町一帯)

長 独立混成第五十九旅団長

少将 多賀哲四郎

独立混成第五十九旅団司令部

高級部員 中佐 藪 伊寿郎

独立歩兵第三百九十三大隊

少佐 福永 侑

〃 第三百九十四大隊 大尉 武田 登

〃 第三百九十五大隊

大尉 脇本 幸男

独立混成第五十九旅団砲兵隊

大尉 遠藤 修三

独立混成五十九旅団工兵隊

少佐 美馬 敬一

〃 通信隊

大尉 清谷 州一

歩兵第三十聯隊

大佐 富沢 国松

独立速射砲第二十五中隊

海上挺進基地第四大隊ノ一中隊

山砲兵第二十八聯隊第五中隊

◇中地区隊(平良町北部)

長 騎兵第二十八聯隊長

大佐 上田 巖

騎兵第二十八聯隊

独立機関銃第十八大隊第三中隊

特設警備第二百九中隊

中尉 当間 林光

特設警備第二百十中隊

中尉 宮城 清昌

◇南地区隊(下地村一帯)

長 歩兵第三聯隊長 大佐 怡土 軍

歩兵第三聯隊

独立機関銃第十八大隊(二中隊欠)

少佐 斎藤 甚蔵

山砲兵第二十八聯隊第六中隊

海上挺進基地第三十八大隊

少佐 藤倉長太郎

野成作井第八中隊

◇伊良部支隊

独立歩兵一〇大隊ニ若干ノ砲兵ヲ配ス

(本項、六十ページ付記参照)

第四章 初空襲の洗礼

(1) 敵機の独り舞台

昭和十九年十月十日晴れわたった秋空の朝もやを衝いて不気味なサイレンの咆哮が宮古全島をふるわした。台湾東方海上を遊ぶ中のアメリカ第八機動部隊による沖縄初空襲が行なわれたのである。第卅八機動部隊は正規空母十七、巡洋艦十四、駆逐艦五十八、計九十

四隻から成り、九百機の艦載機をようする強力部隊であった。この日延べ八百余機が沖縄、宮古、石垣島に来襲、那覇では軍民合わせて千余名を殺傷、住家建物一万余戸を焼き、全市をまたたく間に廃きよと化さしめ、沖縄防衛の出鼻をくじいた。宮古には午前七時卅分から八時十五分にかけて延べ十六機のグラマンが来襲、主として飛行場及び漲水港沖に淀泊中の船舶に攻撃を加えた。